

合浦公園には、「合浦公園」と書かれた石標が国道4号側に面するように建立されている。しかし、公園



「三誓の松」(右端の大木) 近くにあった「合浦公園」の石標。
左下の建物が招魂堂で、1915(大正4)年に、この場所から公園の東端へ移転する。
=大正初期・青森県史編さん資料

石標は、1902(明治35)年1月の雪中行軍遭難事件と関連深い。同年7月、事件により亡くなった将兵らの招魂祭が公園の招魂堂で挙行され、その際に寄贈されたものなのだ。興味深いことに、設置された石標の位置は現在の場所ではなかった。当初は公園の象徴とも言える「三誓の松」の間近に建てられたのである

は青森観桜会と東青連合招魂祭が行われるようになった。市民の余興や娯楽の空間となった公園には、多くの人があつてくるようになった。それに拍車をかけたのが、交通網の充実だった。1924(大正13)年、公園最寄りの駅となる浪打駅が開業した。続いて篠原善次郎による乗合自動車

が青森駅から合浦公園までを運行した。後に乗合自動車は市営バスとなるが、同区間を変わらず運行した。1990(平成2)年、石標は北方へ約100メートル移転し、現在の位置に落ち着いた。

合浦公園通史⑥ 石標に見る公園の歩み

中園 美穂

(青森県史編さん調査研究員)

(写真参照)

合浦公園が交通至便な公園へと変わっていく中で、

公園には数多くの石碑がある。太平洋戦争中に消えたものの、戦後に復活したものなど様々だ。何れも深い歴史が潜んでいるが、「合浦公園」の石標と場所の移転には、公園自体と公園を取り巻く社会環境の変遷が如実に反映されているといえるだろう。

日露戦後の1906(明治39)年に、青森市当局が旧奥州街道以南へ公園域を拡大した。そこでは東青連合招魂祭や青森観桜会の余興として人気があった自転車競走大会が挙行された。1920(大正9)年5月に、青森観桜会が合浦公園を会場に開会されて以降、毎年5月になると、公園で

1950(昭和25)年、公園内に市営野球場と市営競輪場が設置された。公園